

Ochererago が紹介する本は…

『人間失格』

太宰治著（日本図書センター）

前書き・読み始めた契機

太宰治生誕百周年を契機に、この多くの小説、さらには漫画などにも影響を与えたと言われる『人間失格』という名作品がアニメ化された、集英社文庫は人気漫画家小畑健の表紙でかなり売れている。更に映画化されることも明らかになった、二〇一〇年初春に公開予定となっている。私も先日、そのアニメを見たが、考えさせられることが数多くあった。そして、原著を再び読み進めてみたいと思った。

本の特徴

「人間失格」という文学作品は太宰治の自伝だとよく言われる。しかし、わたしにとつて、これは決して自伝ではない。そのところを間違うと、とてもないことになるので、よくそのことを頭に入れておくことが重要である。

この名作は「入れ子構造」という特徴がある。この著書の正文は日記の形式である第一の手記、第二の手記、第三の手記と、大きくの三つの部分に分けられている。最初の「はしがき」と最後の「あとがき」は、「私」の体験談とされている。

当初、「第一の手記」の原稿では主人公の自称は「私」であったが、途中で書き直され「自分」となり、結果的に手記全体にわたりその一人称が使われた。

物語のあらすじ

まず、第一の手記は、葉蔵の幼年時代の実家のことである。この部分は「恥の多い生涯を送って来ました」という言葉から始まる。一体、葉蔵にとつての恥だったのは何か、また、それを考えながら読み進めて行くところである。そして、恐怖と不安は幼年時代の葉蔵を脅かす。葉蔵は、なんとかそれから逃がれるべく、その方法を考えている。

次に、第二部分の手記では中学時代から高等学校時代までにかけてのこと、記述される。中学に入っても相変わらず道化を続けていた葉蔵だが、その葉蔵に一大事件が起こる。また、高等学校に入学した葉蔵がその後長い付き合いになる、友人である画学生の堀木と知り合うシーンが描かれている。

さらに、第三の手記の部分では次のようなシーンが描かれる。悪い事件を起こした葉蔵が高等学校を追放になってしまう。さらに、葉蔵の人生に影響を及ぼす大事件が相次いで起こるのである。その結果、葉蔵は狂人として入院させられてしまう。こうして、「人間、失格。もはや、自分は完全に、人間でなくなりまし」と、タイトルと呼応している有名な言

葉で葉蔵の手記が締めくくられる。

最後のあとがきの部分で、「私」は店の女主人からこの手記を見せられて読んでいるのだ。葉蔵は今も病院で療養生活を送っている。しかし、女主人は葉蔵のことを「神様みたいないい子でした」と表現するのだった。

印象に残った記述

先頭の部分といったように、「第一の手記」の最初で「恥の多い生涯を送ってきた」という有名な文と述べている、後の物語を考えさせられる文字である。

物語の展開に伴いて、「第三の手記」で「人間、失格」（p.218、8行目）と書いている、その次に、「もはや、自分は、完全に、人間でなくなりまし」（p.218、9行目）と記述されている。

有名な文はいくつかあるが、でもこれまた有名な言葉で葉蔵の手記は終わっていることは非常に印象的である。「人間、失格」という言葉は著書の見出しとぴったり対応している、さらに、「私」にいろんな事件が相次いで起こったあと、「人間でなくなりまし」で「私」の完全に絶望な気持ちもきちんと描かれた。主人公はこのような社会の醜い部分に身を堕としてしまった時点で「人間失格」となってしまうのだろうか？それとも、彼は生まれながらに「人間失格」だったのだろうか。そもそも彼

は本当に「人間失格」だったのか。確かに読者にとって、色々と考えさせられる記述と小説である。太宰は、「人間失格、もはや、完全に人間でなくなりました」から自殺したのではなく、逆に、完全な文学作品を残せたから命を絶ったのかとさえ思える。

推薦の理由

この名作は誰もが知っている日本文学の代表作品である。特に十代にも読まれている作品の一つだ。社会に受け入れられない純粹さがテーマのひとつであるため、二十代三十代で読んだら恥ずかしすぎるとか、暗くて嫌だとか見る向きもあるが、何歳で読んでも、文章の鋭さ美しさ深さにハッとさせられる。

この本は社会人に推薦したい。その最大の理由は、大人にとって生きがいとはなにかということを真剣に探索させる必要があることである。「人と人」、「人と社会」、「人と世間」などの人は様々な繋がりの中で生きていくか、この本ではその「繋がり」の本質が描かれていると思う。主人公と自分の立場を置き変えながら読んでいくと、それは絶対的な強度を持ったショックのように感じられる。この作品が多くの人の心に届き、澱のように沈殿し、長い時間をかけて影響を与えていくということは確かにあることであろうと納得させられた。

僕は今もうすぐ大学を出て就職し、一応「社会に

出て」自立してるんだけど、今でもこういう気持ち
はぬぐえないでいる。今の僕の周りにいる同年代の
友達や年上の先輩はと言えば、さすがに折り合いを
つけて上手く生きていくように見える。彼らは主人
公のように多少の息苦しさを感じつつも「自由で幸
福な生き方」を実践し充実した風に送っているよう
に見受けられる。しかし、僕自身はどうも彼らが送
るこの「自由で幸福な生き方」ってのが、既成の枠
組みに自己を埋没させた生き方のように思えてし
まってならない。

その他、原著を読んてなかなか理解しにくい場合、
物語のあらすじを把握するために、分かりやすいア
ニメや映画も見るという手段をとることもできる。
幼い子供や日本語の読解が苦手な留学生にはその
方法がお勧めである。それをみるだけでも、きつと
著者が伝えたいものを同時に目の前に、強い印象を
もつと感ずることができるであろう。

後書き・まとめ

私にとつては、過去自分の価値観の共感を呼んで、
圧倒されるくらいにすばらしい作品だと思ってい
る。これほど偉い作品に出会ったことは幸運だ。本
を読み終えて今この本と出合えて良かったと思っ
た、名著との出会いは、いつも運命的に感じられる。
社会人の皆に是非読んでみてほしい。

『人間失格』

著者：太宰治 だざいおさむ

出版：日本図書センター

出版年：1995

定価：2,600円（税別）

ISBN：4-8259-9406-0

※全国の書店で購入可能。

※図書館で借りることもできる。